

書評

守屋俊彦博士著

『古事記研究——古代伝承と歌謡——』

河野 頼 人

守屋俊彦博士の原著、『記紀神話論考』（雄山閣、昭和四十八年五月）は、古事記・日本書紀（皇主記も含む）の神話を考究された論文二十三篇を、「創世神話の問題」「火神出生神話とその周辺」「高天原と出雲の神話」「天孫降臨神話とその周辺」「日向神話の原型」に分け、そして、その「あとがき」に、「記紀の神話を本文批判しながら、……その原型を探ってみることにした。そのうえで、こんどは逆に、それがどのような筋道を通じて記紀の中にとり入れられたか、そして、その際どのような変貌を受けたかを考えてみることにした。」と、その方法論と意図を述べておられる箇所に、かつて紹介したことがある。

つづいて、この度、「主として古事記中巻、下巻の物語について」（『あとがき』の論文十四篇を内容とする『古事記研究——古代伝承と歌謡——』（三弥井書店、昭和五十五年十月）を御発行、記・紀を対象とされる博士の考察は、前著と相俟って、ほぼその全般に及んだわけである。ただし、表題の如く、本書は記が中心。

この両書に所収の論文の執筆順序をみるに、前著が、昭和四十四年一月までに発表の論文を、本書は、それにひきつづき、「国語と国文学」昭和五十四年十一月号に発表の論文までを収める『剣の呪——物語伝承——』は、昭和四十二年十二月、昭和四十五年三月に発表の二行を一冊にしたもの。そして、未

発表論文二篇を含む。壮大な構想のもと、記・紀を考究されている博士の営為に感動をもって対していることである。

従って、本書の方法論も亦、前著に連つていってよいと思う。そして、猶、本書の「あとがき」に、

「私は、これらの物語を読んでゆくうちに、文学としての発想や、筋の展開や、さらには表現技術などに、私が文学と思つているものと、やや異なるものがあるように感じるようになった。つまり、一般的な文学の概念ではおおいきれいなものがあるということなのである。そこで、この異なるように感じるものが、どこからきているのかを考えてみようとしたのである。

この時、古事記の物語について、倉野憲司博士が『しかし中巻における人の代の物語は、まだ神と人との交渉が極めて深く、人が神から十分解放されていない。』（岩波文庫『古事記と神話』と述べていられるのを思い出した。そこで、その神についての物語、つまり、神話がこれらの物語と交渉しているために、このような文学としての違和感が生じるのであらうと考えてみたのである。そこから、これらの論文では、物語の下に、神話や神話的なものを探る、という方法を一貫してとつてくることになったのである。それはまた、……神話と物語との関係、もう少し広くいえば、宗教と文学とのそれを考えてみるということでもあった。……」（三五二頁）

とあつて、詳しくは、

さて、本書には、Iに、

(1) 剣の呪——物語伝承——

(2) 大久米命の役目——久米記の伝承——

(3) 久米の仙人——久米正雄の経路——

(4) 沙本毘売の物語について——その古代的基盤——

(5) 出雲建が 佩ける刀

(6) 倭建命の葬送物語

と、「中巻の物語についての論文」が、Ⅱに、

(7) 黒日売の饗宴

(8) 山代の歌と丸瀧氏

(9) 「御諸の その高城なる」(六〇)の歌をめぐって

(10) 女鳥王物語の原型

(11) 軽太子と軽太郎女

(12) 赤猪子の話——三輪伝承考——

(13) 吉野の童女——吉野通の伝承——

(14) 一言主大神出現の物語

と、「下巻の物語についての論文」(あとかぎ)の併せて十四篇が収められている。

これらの諸論文を読んで、もっとも心うたれたそれは、文学を作品として読む、古典研究の原点に立ち、各論文の、先ず現在の形で読み、鑑賞していく筆そのものが既に美しい文学であること、そして、「神話と物語——宗教と文学との関係」を表現に即して考究していく真摯な方法であった。

例えば、(4)「沙本毘売の物語について——その古代的基盤——」、(7)「黒日売の饗宴」や其の他、優れた読みがみられるのであるが、(4)についていえば、夫である垂仁天皇と兄である沙本毘古との愛の板挟みの中で、「彼女が突然に悲劇の渦の中に巻き込まれてゆく過程」が、短かい会話の一つ一つに「生き生きと表現され、……きわめて

迫力のある冒頭」(六〇)となっていて、会話の展開から、何も書かれていない沙本毘売の苦悩を読み取るのであった。そして、「恋愛悲劇としてみるには、恋愛(ここでは夫婦)が終始、兄弟愛より低調であることなどが、遺憾な点」(丹波孝子氏「日本古代文における恋愛」とすることを認めつつも、彼女の行動にはもっと複雑な陰影があって、簡単に割り切れない、そこで、「この物語を一度古代の社会の中に返してみて、そこからこの遺憾と思われる点について考え直」(六四)五頁)していくのであった。

それから、右に、現在の形で読むといったが——沙本毘売の悲劇を読むのも亦——、ここに本書の基盤が置かれている。

すなわち、記・紀所収の「物語の殆どは、歌物語の形式になっている、多くの歌謡を含んでいる」(あとかぎ)のであるが、この歌謡と物語との結びつきを一度切ってしまう高木市之助・土橋寛博士の方法を、「歌自体としてみようとされている……、これは歌を文章の中に置いて解釈した、記伝以来の伝統的な方法からすれば、まさに画期的なもの」(同、二六頁)と評価するのであるが、猶、博士は、

「現実には物語と結び付いているのだから、こんどは、その結び付いている理由を明らかにしてゆかなければならない。……」と、そしてつづいて、本書所収の、

「これらの論文においては、その理由について、さまざまの角度から考えてみるとともに、そこから、独立歌謡としても、新しい内容をみいだしてみようとした……」(あとかぎ、三五二～三五三)というのであるが、本書の新しさと本書から受ける感銘の深さは、一つにここにあると思うのである。

そして、前掲引用の「あとかぎ」にいう如く、「物語の下に、神

話や神話的なものを採る」ことを、一貫して発想の根柢におき、

「原物語が現物語に変更する作業の中で、……」(6) (二〇二頁)

「この歌の原歌を、……」(6) (二二二頁)

「この物語の原型……」(6) (二四九頁)

等といひ、そして、

「これらの原歌を伝承していたのは誰だったのであろうか。伝承者の問題……」(6) (一七三頁)

「この話を作り、伝承した者が、……」(6) (二七四頁)

等と、伝承者の問題にも深い関心をおいておられるのである。そして、「文学への発足が神話としての終末となった」(6) (四六頁)の語——
轉伝承考——、三二三頁という一節にも、しみじみ共鳴することである。

以下、本書の論文を、紙数の関係もあるので、本書の一面に偏って申しわけないのであるが、二三を選び御紹介したいと思う。

(1)「劍の呪——物部伝承考——」は、物部氏の服属の経緯を記した神武記・神武即位前紀について、氏族が朝廷に服属するとその氏族の神話は抹殺されるのが普通であるのに、物部氏の場合は、抹殺されるどころか記・紀にその神話をとどめていることに注意。物部氏の歴史を、「長髓彦の孔舍術の戦い以来の、必死な、しかも、美事（みこと）な抵抗の画面の中」(二二頁)から描き出し、そして、物部氏の職掌を詳説する。長髓彦の抵抗を、「美事な」と形容するのであるが、先入主を去って文献を忠実に読み取るといふ本書を貫く確固たる学的姿勢を、ここに私は見る。これは前著から一貫する姿勢であって、例えば、海幸彦山幸彦物語において、山幸彦が海へ行って呪物を手に入れる現行の筋は変で、その所持者は海幸彦でなければならぬと、紀の四の一書、火折命が山幸彦でなく海幸彦になっているところ

に、王権神話に改変される前のこの神話の元の型を発掘、海宮訪問神話は海人族の若者が成人となっていくに必要な試練の過程——成人式を神話にしたものであることを明らかにされたものもここに關わる。当時の感銘を、今改めて思い出すことである。

さて、長髓彦の物語には、一つには、「かつて石上なり洪江の地に盤居し、独自の天地に住んでいた時代の物部氏」、一つには、「朝廷に服従した後、その官僚としての盛望をはせた時代」(二二頁)をみる事が出来る。こうした矛盾した気持が、「一方では抵抗の歴史を語るとともに、他方ではそれを自己氏族のこととせず、縁組みした長髓彦のこととするような、きわめて手のこんだ構成をとらしめることになった……」(二二二頁)と、そして、

「この長髓彦の頑強に抵抗し、堂々と主張している姿勢の中に、実は、かつての日に強大を誇り、朝廷に拮抗した大豪族物部氏のそれが塗りこめられている……」(二二三頁)と論じられている。

本論文は、つづいて、「物部氏は本来戦闘そのものに参加するのではなく、……その管理せる強力な呪力を駆使することによって、……その氏族の生命そのものを制することを使命とした……。つまり物部氏は、剣に神靈を降下させ、その呪力によって相手を屈服させることを、その本来の職掌とした……」(三〇〇頁)と、物部氏と石上神宮との関わりを明らかにされていくのである。

そして、神武即位前紀の長髓彦が饑速日の命の天の羽羽矢一隻と歩鞅を天皇に見せてのやりとり、「出雲の国譲りの場面」(二七頁)を相重ね、そしてこれは物部氏の降臨神話であるといひ、「朝廷への服従や忠誠を示すための手段などとはなっていない」(八頁)という指

摘は鋭い。

(9)「『御諸の その高城なる』(六〇)の歌をめぐって」では、葛木山に天降る鴨氏の降臨神話を、(10)「赤猪子の話—三輪伝承—」では、三輪氏の降臨神話を、又その他の論文において、古代の氏族は、その氏族にふさわしい降臨神話をそれぞれ持っていたことを説いて説得的である。

右の(10)を紹介すれば、赤猪子は三輪の大神に仕える巫女。この物語は、三輪氏の聖なる川、美和川のほとりで三輪山に天降った神を迎える三輪氏の神婚神話であった。ところが、三輪氏が大和朝廷に服属したために、巫女が童女になり、大神も天皇にすり替えられて妻見ぎ説話にこの神話が変容したのであると。

又、(3)「久米の仙人—久米伝承の経路—」も亦、現在の形から、その中に埋没している久米部の神話を、「仙人は墜落したのではなく、空から降臨」(五一頁)したのであると剔抉するのである。そしてそこには、既述の如く、自分を墜落させたその当の女と結婚している久米の仙人に、王朝の好色者とは異なった素朴さを感得、川での洗濯は、ただ女の白いはぎを見せるためだけではない別の意味を持つことを探り出すという読みの裏付けがあるのであった。

如上に紹介の論文は、「物語の下に」、古代の氏族の「神話や神話的なものを探り、それらがいかに王権神話の中に組み込まれていたか、その筋道を明らかにされているのである。

又、仁徳紀三十年十月の、「山背の 筒城の宮に 物啓す わが兄を見れば 涙ぐましも」(四五頁)について、

「……口子臣、口比売という名や、『匍匐』うという行動に絡ませてみれば、この『物申す』というのは、宗教の粹の中で捉

え、神に祈願する意に解した方がよい……」(1) 山代の歌と丸瀧氏、一八九頁

といい、(1)「軽太子と軽太郎女」においては、「大前 小前宿禰が金門蔭 かく立ち来ね 雨立ち止めむ」(八七)を独立歌謡とみ、この歌のポイントを「金門」におき、この物語と物部氏との関わりについて考えるのであるが、そこで、「歌と文との結びつきの拙さ」(二六四頁)と、単語を文脈で読み取り、そして、(10)「吉野の童女—野洲の伝承—」では、「『童女』というものは、単に年齢的に若いというばかりではなく、その上にさらに宗教的なものがかぶさっていること」(三三三頁)を明確にし、この吉野川を舞台に、この川に関わりのある氏族のそれぞれの伝承を記・紀から掘り起こす。そして、「かつてはこの氏族の誇るべき天降神話が伝承されていた」(三三三頁)と、前述の(1)やその他の論文とも相連なる、王権神話に統合される前の吉野連の神話を、私たちの前に示されるのであった。

又、記・紀の間の伝承のずれを考察して、(1)「黒日売の饗宴」は、記・紀では、「ただ単に、天皇が応神と仁徳、相手の女性が兄媛と黒日売、と異なっているというようなどではなく、そもそもこれらの物語を作っている理念がまったく異なっている」(二四五頁)こと、そして、(10)「女鳥王物語の原型」では、「紀のは男性を中心とした政治の物語……、記のは女性を中心とした愛の物語」(三三三頁)となっているといい、「女鳥王は異端の女性……異彩を放っている。それだけに魅力的な女性……現実には存在したというのではなく、この物語の中で作られた女性ではなかったか」(三三三頁)と捉えるのであるが、「この物語の基盤に、神衣をめぐる、古代の天皇の地位獲得についての秘儀があった……その秘儀を語ったのが、この物語の原型」(二四九頁)であるといひ、

「この物語が反逆物語に変容した時、歌物語の形式になったた

めに、大神と交わすことばとしての歌謡をそのままに使つた……」(二五二頁)

と、この歌物語の成立を説いて詳しい。

そして、(四)「輕太子と輕太郎女」の物語についても、「記の方はやや不自然なものになっている。従つて、紀の方が原型をとどめているのではないか」、そして、「恐らく記の方は、この物語全体を叙情的な恋物語に仕立てようとしたために、このような構成になつた」(二七三頁)と分析、「二人の御子が対立するところで、紀に物部大前宿禰とあるのが、大前小前宿禰」(二八五頁)とあることに、伝承者としての輕部、そして、「反物部的なものを汲みと」(二八八頁)るのである。

このような文献読みの姿勢は、後学として学ばねばならぬことであると思ふ。(6)「倭建命の葬送物語」は、「この物語を分析しながら、記における歌と地の文との結びつきの方法を今一度み直してみようとしてみたのである。さらには、呪術やその周辺にある神話などを土壌とし、そこから文学が発生してくる場合があることをもあわせて考えてみようとした」(二〇五頁)ものであるが、中で、葬送歌である記三四の、

なづきの田の 稻幹に 稻幹に 匍ひ廻ろふ 野老菟

について、「やや表現不足」として二句を補なう『古事記伝』や、四句補なう『稜威言別』の説、それから、地の文との結びつきを切つてみる高木博士の童謡説を紹介するのであるが、それが何故葬送歌であるのか、「つまり、葬儀という枠の中でこの歌の性格を考え直してみ」(二〇〇頁)時、「匍ひ廻る」「なづきの田」を手がかりにして、これは「やはり、葬歌だった」といい、

「……それは挽歌的な意味における悲しみの歌ではなく、もっとと現実的な意味における魂呼びの歌……実際に歌われた呪歌なのである。従つて、これだけで完結しているのであって、記伝

や音別のように句を補う必要はないのである。だからまた、この歌を歌っている人は、子供でもなければ、恋人たちでもなく、こういう儀礼にあずかる人々とした方がよからう。」(二六五頁)と本文批評にも及び、この歌の本質を説き、歌の場にふれられて、私には衝撃的な論文であつた。

さて、如上、当然ふれねばならぬ論文をも残し、恣意的な取り上げ方になってしまい申しわけないことであるが、前掲の「あとがき」に、「物語の下に、神話や神話的なものを探る」という博士の方法論を中心に、そして、例えば、王権神話に統合される前の古代の氏族の神話は、その氏族にふさわしい降臨神話をそれぞれ持っているということを読んで来たのであつたが、この点に關し、もし、いうことを許されるならば、それは、記・紀の天孫降臨神話の雛形のようなものであつたのであろうか。前者に、海洋系の氏族の迎神儀礼についての詳述があつたが、古代の氏族の神話について、いかなるそれを想定していられるのか、この点、猶、おうかがい出来たら嬉しいと思つたことである。

ついでいえば、(3)「久米の仙人——久米伝説の経緯——」に、これを久米部の神婚神話と捉え、既に引用した如く、「仙人は墜落したのではなく、空から降臨」とあるのであるが、記に、「天忍日命^八此者大伴連等之祖^レ。天津久米命^八此者久米直等之祖也^レ。」、紀の四の一書に、「大伴連遠祖天忍日命、帥^三来目部遠祖天穗津大来目、……」とある天孫降臨の条の「久米直」「久米部」との関わりについても及んでいただけたらと思つた。

以上、本書の全貌を見るのに甚だ偏つた取り上げ方であり、かつ、読み誤りも多い御紹介になつてしまつたことに忸怩たるものがあるが、心からお詫びし、前著と相俟つて体系的に論文をおまとめになり、私たち後学に多くの御教示と示唆をお与え下さつたことに感謝申し上げて筆を擱きたい。

— 北九州大学文学部教授 —